

イエズス会日本布教における日本人修道士の役割

著者	神田 千里
著者別名	Chisato KANDA
雑誌名	東洋大学人間科学総合研究所紀要
巻	24
ページ	248(001)-227(022)
発行年	2022-03
URL	http://doi.org/10.34428/00013667

イエズス会日本布教における日本人修道士の役割

神田 千里*

はじめに

一六世紀中葉から一七世紀前半にかけてイエズス会が日本で行った布教活動における日本人信徒の活動については、説教を担当した日本人会員、非会員ながら宣教師の布教を全般的に補助した「同宿」、同じく非会員でキリシタンの日常的司牧、教会の管理に関わった「看坊」等を中心に研究がなされてきた。五野井隆史氏が禁教下で日本人修道士や「同宿」が布教に重大な役割を果たしたことを指摘し「看坊」にも注目され、高瀬弘一郎氏が、全教会の相当部分が「看坊」の日常的管理に任されていたとみられることを指摘された¹⁾。「同宿」についても柳田利夫氏が取り上げられ、最近では岡美穂子氏が「同宿」、日本人イルマン(修道士)の「仏教的属性」に注目されキリシタン信仰展開の特質を論じておられる²⁾。

ここでは主にイエズス会修道士 (fratres) となった日本人信徒を取り上げ、布教の際に重要なポイントとなった日本語の問題に注目したい。すなわち来日したヨーロッパ人宣教師たちは日本語しか通じない日本人を相手に、どのように布教を行ったのかという点である。日本語での布教は必須だったはずであるが、日本語

の習得ないし通訳の獲得等日本語力の問題にどのように対処したのであろうか。

またイエズス会の宣教にもなって日本人僧侶(以下イエズス会文献にみえる bonzo の翻訳習慣に倣い彼らを「仏僧」と記す)と論争を行ったが、ヨーロッパ人宣教師は如何にして論争をなし得たのだろうか。異文化コミュニケーションの基本要件として、言語の習得のみならず日本の仏教文化への理解や造詣が不可欠と思われるが、外国人宣教師たちは如何にして「仏僧」に対抗すべくこれを獲得したのだろうか。

既に幕府の禁教令以後の布教について五野井隆史氏がこの問題に言及しておられ³⁾、また最近では高瀬弘一郎氏がヨーロッパ人宣教師の日本語力について言及され⁴⁾、また岡美穂子氏がこの問題の重要性を指摘されている⁵⁾。本稿ではこれらの研究の驥尾にふしてこの問題を考えてみたい。

結論を先取りするようであるが、後述するようにイエズス会内では日本語習得の困難さを指摘する見解は少なくなき、日本語での説教を行うための障壁は小さくなかったと思われる。とすれば説教に関して日本人修道士の存在の大きかったことが予想されよ

う。特に「仏僧」との論争に必要な仏教の素養はさらに修得困難であることは推測にたやすい。元僧侶のキリシタンを始めこどもも日本人の重要な役割が予想される。

一方説教に必須のキリスト教に関する基礎的理解を日本人修道士は如何にして獲得しえたのだろうか。日本人がラテン語で教理を学ぶことの困難はたやすく予想される。「暗誦しただけの公教要理しか知らず、それで鸚鵡のように説教」するとの酷評も知られる。こちらの困難にはどのような対処があつただろうか。

以上の点について本稿では具体的事例から辿れる限りで明らかにしていきたい。なおこうした点に注目するのは、言語・文化の障壁の大きさが所期の目的達成を困難にしたことを確認するためではなく、その困難な環境からもたらされたキリシタン信仰の特質に注目したいがためである。言い換えればキリスト教信仰一般としてではなく、歴史名辞により「キリシタン」信仰と呼び習わされてきた信仰の内実に迫るためである。

本稿で検討する時代は主として、前述の五野井氏の研究では扱われていない一五八七年の豊臣秀吉の伴天連追放令以前の時期、史料は、一五九八年刊行のエヴォラ版カルタス（以下CEVと略称）、同時期の幾つかの宣教師報告書写本、及び当該時期に関するルイス・フロイス著『日本史』（原文はJ・ヴィッキ編纂、リズボン国立図書館刊、一九七六―一九八四年（以下Wickiと略称）を使用）にみられる当該期の記述を中心としたい。

I 日本語による布教

(1) 日本人修道士を養成せよ

一五七〇年代後半の時期、日本イエズス会を統括していたフランシスコ・カブラルは巡察師ヴァリニャーノと同様、日本人修道士をイエズス会に迎えなくてはならないとの見解をもっていたと考えられる。

一五七六年頃と推定される^⑥フランシスコ・カブラルの書翰では、異教徒に説教できるのは日本人のみであり、日本人の説教者養成のための修練院 (*la casa de probacion*) は「単に非常に必要というだけでなく、これなくしては日本でデウスの御法は広まらない」とその必要性を強調している。カブラルによれば日本語は日本人すら学び修練する必要があるほど難解であつて、例えばイエズス会の司祭が長年学び修練しても異教徒に説教できるには至らないほどである。「日本語に最も習熟した司祭ルイス・フロイスも修練して十六年になるが、一人の異教徒にも敢えて説教しようとせず、キリシタンに対してさえ、できるもののかんりの苦惱を伴う (*con harto mortificacion*)。従つて日本にいる司祭にはミサを立てキリシタンを告解する以上はできず」「我々には説教をなすべき土地出身者を導き、舵手として彼らに仕えるしかできない」(*Jap. Sin 8 II, f. 13v.*)と述べている。

さらに同書翰では日本イエズス会に日本人を受け入れる必要があり、もしそうしないなら「このキリシタン宗団 (*esta chrystianidad*) はこれ以上増加するどころか維持することすらできないと

思われる。というのは、上述のごとく、説教する人員がいなくてはわれわれ〔イエズス会員〕に出来ることは僅かしかなく、これらの〔説教する〕人々がイエズス会員たることが重要なのである」(Jap.Sin 8II f.136v.)とも述べる。

この時期フランシスコ・カブラルは別の書翰でも同様の見解を述べている。すなわち一五七七年九月一日の書翰では、「日本は大変大きく重要な宗団 (cousa tão grande e de tanta ymportancia)」であるのにヨーロッパ・インドのイエズス会ではこのことが十分に認識されていないので、「狛下 (イエズス会総長―引用者) に報告し、この地域の情報を伝え、併せてこの地域のニコレジオに定収入 (renda) を与えることをポルトガル国王と交渉するために〔誰かが〕行くことを非常に望んでいた。〔というのは〕そのことにより、多くの土地出身の部下を創り出すことが出来るからであり、〔それにより〕多くの成果を生むことが出来るからである。というのは〔日本の〕言語が大変難しいために、土地の博学な人々の間で自由に説教できるほど身につけることは決して出来ず (nunqua se pode aprender de maneira que livremente se possa pregar entre as pessoas doutras da terra) 土地の出身者や上手に説教出来るようになるために日本の書き物を用いて教えられる必要があるからである」(Jap.Sin 8I, f.136.)¹⁷⁾。

この主張は『日本諸事要録』(Sumario de las cosas de Japon) で知られる巡察師ヴァリニャーノの主張とも一致している。ヴァリニャーノもまた日本人の不可欠な役割を次のように述べている。「イエズス会は彼ら日本人修道士の仲介がなければ (si no fuere

por medio de los Hermanos japones) 日本にしっかりと根を下ろすこともないし、収入をも、存続のための適当な方法をも得ることが出来ないだろう。なぜならば異国人で、習慣や諸条件総てにおいて反対で異なっている人々に彼ら〔日本人〕は多くの愛情を持つには至らないからである。しかし彼ら自身の息子や兄弟がイエズス会に入ると、彼らは同国人とのやり取りの仕方を我等よりもずっとよく知っており、……疑いなく「仏僧」らがしたのと同じこと……〔即ち〕ふさわしい権威と信頼を勝ち得」るであろう (Alvarez-Taladriz, J.L. (ed.) Sumario de las cosas de Japon, Sophia University, 1954, pp.183-184; 松田毅一他訳『日本巡察記』、平凡社、一九七三年、八六頁) と。

両者ともに日本語力の問題についても、日本の習慣・文化への理解についても日本人に依存する他ないとみていたといえよう。日本イエズス会の統括者も巡察師もこの点で見解を同じくしていたことは、これがイエズス会全体でもかなり有力な見解であったと予想される。従来の研究では日本人キリシタンの評価についてヴァリニャーノとは見解を異にしていたとみられるカブラルであるが、この時点でこの問題についてはカブラルの見解は右の通りであり、これが一六世紀後半の日本イエズス会内部における有力な見解であったとみて差し支えないと考えられる。

さらにこの見解がどのような現実をふまえたものかを検証するために、先のカブラル書翰で日本語の難しさの一例として引き合いに出されたルイス・フロイスに注目したい。フロイス自身の自らの日本語力に関する評価を示す、著書『日本史』に記された記

事をみてみよう。そこでフロイスは自分を「(日本) 語を適切に話せるその司祭 o padre, que sabia arrezoadamente fallar a lingua」(『日本史』第二部第三章 Wicki, III, p.23.) とする⁹⁸。カブラルも「日本語に最も習熟した司祭」と評するように全く話せないどころか、この時期大友宗麟と話しをしていることも知られる。高瀬弘一郎氏によれば、江戸幕府の禁教令以前の時期には、ヨーロッパ人司祭の八割程度が一年程度の訓練で信者の告解を聴くことができた⁹⁹。「十六年」の修練で話せないとは考えられない。

ここでのポイントは「一人の異教徒にも敢えて説教しようとせず、キリシタンに対してさえ、できるもののかんりの苦悩を伴う」という点である。外国人を説得し、場合によっては日本人僧侶との論争をも覚悟した説教の能力と、単なる日本人との会話能力、または深刻な論点でのやりとりでも、帰依していることが前提の、信徒の告白を聴く能力とでは次元の違うものが要求されることは想像にたやすい。同信者間の交流の次元と、文化の差異を射程に入れた異文化コミュニケーション、それも全人格に関わる布教とは自ずから別の事柄だったと思われる。

この時期に現地のキリシタンの要請を受け、カブラルの命令でフロイスは日本人修道士ロケをともなって肥前へ説教に赴いた。その際「修道士ロケと私は説教を分担し」てフロイスが「日に二度、告白の秘蹟とキリストの教えについてキリシタンらに説教」し、対してロケ「修道士は異教徒に対して二度説教」する、とそれぞれ役割を分担している(一五七八年九月三〇日ルイス・フロイス白杵発書翰 Jap.Sin.45II f.3v., CEV I f.405v., 松田毅一監訳

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期五巻、同朋舎——以下『報告集』三五の如く略記——、四二頁)。論争を覚悟すべき「異教徒」への説教は日本人ロケが担当しており、フロイスが「二人の異教徒にも敢えて説教しようとせず」とのカブラルの証言を裏づけるものと思われる。

ルイス・フロイス著『日本史』には同じ時期に白杵では「ルイス・フロイス師以外には「司祭は」誰もおらず、またダミアン修道士のほかに説教する者とはいなかった」(『日本史』第二部第六章、Wicki, III, p.50. 松田毅一・川崎桃太訳書第七、一八七頁)と記しており、これもフロイスが、異教徒に公然と説教できていないことを物語るものである。

一五八一年に日本人修道士コスメと共に布教に派遣された折もコスメが説教を担当した。コスメは日中に「すでに三、四度説教を行い、夜にまた説教する」という日程を強いられた(一五八一年五月一九日ルイス・フロイス北庄発書翰、CEV II f.12v. 『報告集』三五、三一八頁)。過酷といふべき労働環境でコスメが疲労したので「高(山)飛(驛守)の熱心な勧めに従って、私がカテキズモの説教を手帳から読んで聞かせることにし、その後、これについて少し説教を行ない、人々の出した疑問に答えた」(一五八一年五月二〇日ルイス・フロイス北庄発書翰、CEV II f.13v. 『報告集』三五、三三四頁)という。この時点では当然説教ができたはずだが、基本的に説教はコスメの仕事とされていたようである。

一五八六年、日本副管区長ガスバル・コエリョが豊臣秀吉に謁

見した際ルイス・フロイスが通訳を務めており(一五八六年一月一七日ルイス・フロイス下関発書翰、CEV II ff.176-176v.『報告集』Ⅲ七、一二七頁)、公的な場で日本語を用いていた。しかし長年熱心に日本布教に携わっていた、イエズス会の中でも「日本語に関して最も習熟し」たと評されるルイス・フロイスにして「異教徒」に説教することは容易ではなかったと考えられる。まして「仏僧」との論争はさらに困難だったのであろう。

(2) 日本人修道士ロウレンソとジョアン・デ・トルレス
ルイス・フロイスは一五七八年に、日本には大身の権力者に説教できるものはロウレンソとジョアン以外にはいないと述べている(一五七八年一月一六日ルイス・フロイス臼杵発書翰、CEV I ff.174r.『報告集』Ⅲ五、八五頁)。ロウレンソ、ジョアン・デ・トルレス共に日本人修道士である。当時京都・畿内を本拠に勢力を伸長しつつあった織田信長の、三人の息子たちはいずれもイエズス会に好意的で自領に説教師を派遣するよう要請しており、キリシタンになることが大いに期待される。しかしこのような身に説教できる者は日本にはロウレンソとジョアン以外になく、ロウレンソは都に常駐し、ジョアンは日本イエズス会上長のフランシスコ・カブラルに常に同伴しており、共に派遣できないというのである(同上、ibid.同上)。以下日本イエズス会の中で抜きんで、重要な役割を果たしたと思われる二人の活動を中心に日本人修道士の活動を概観したい。

*

ロウレンソは肥前国出身の琵琶法師で、一五五一年山口でフランシスコ・ザビエルから受洗し同宿となり、説教師として活躍した。一五六三年コスメ・デ・トルレスからイエズス会入会を許され、改宗事業に寄与し一五九二年に長崎で死亡した¹⁰⁾。

ロウレンソの活動は多岐にわたる。先ず宣教師らの日本語学習の教師を務めた。毎日夕食の際に日本語習熟を目的に行われる日本語の説教をジョアン・フェルナンデスやロドリゴ(ルイ・ペレイラ)らと共に行っていた(二五五九年一月一日バルタザール・ガールゴ豊後発書翰、『イエズス会日本書翰集』訳文編三、二五八頁、原文編三、一七九頁——以下『書翰集』訳三、二五八頁、原3・p.179.の如く略記——)。

第二に説教を行った。一五六五年、大村純忠の依頼により修道士ルイス・デ・アルメイダに同伴し「日本の宗旨に精通し、デウスのことも相当知っている」「日本人修道士¹¹⁾」として説教に出向き、アルメイダからの指示、さらには純忠からの指示をも受けて大村家家臣の前で説教を行った(一五六五年一月二五日ルイス・デ・アルメイダ福田発書翰、CEV I ff.169v-170.『報告集』Ⅲ二、二九三～二九四頁)。

家臣への説教がロウレンソに依頼された他の例は、丹波国々衆でキリシタンのジョアン内藤が、家臣の改宗と既に改宗した家臣の堅信のために説教を希望したもので(一五七三年四月二〇日ルイス・フロイス都発書翰、CEV I f.341v.『報告集』Ⅲ四、一九七～一九八頁)、ロウレンソは河内から上洛するとジョアン内藤の使者と共に丹波へ旅立っている(一五七三年五月二七日ルイス・

フロイス都発書翰 CEV I f.349v.『報告集』Ⅲ四、一二二頁。

しかしロウレンソの著名な仕事は何といってもイエズス会と織田信長との交渉に際してのものだろう。一五六九年になされた織田信長とルイス・フロイスとの最初の会見にはロウレンソが同席し、しばしばやりとりを仲介している。「何故、「デウスの教えは」都でファンジヨ (Fanjio. 繁盛?) しないのか」との信長の問いにロウレンソが「穀物が生じた時、棘が余りに多く、たちまちその生育を妨げたのだ」と、「仏僧」らが高貴な人のキリシタン入信を嫌って宣教を妨害していることを暗にほめかしている。信長がこれに承えて「仏僧らの恥ずべき生活といとも悪しき習慣について詳しく説き、仏僧らは金銭を奪い肉体を歎ばせることより外に求めていない」と述べたのに対し¹²、フロイスは「ロウレンソを介して」イエズス会の求めるものは俗世の富や名声ではなく宣教のみと言明し、「殿下の恩恵により」日本の仏教宗派との宗論を行うよう懇願している(一五六九年六月一日ルイス・フロイス都発書翰、CEV I f.260v.『報告集』Ⅲ三、二九九～三〇〇頁)。

そしてこの年に織田信長の面前で行われた「仏僧」朝山日乗とフロイスとの著名な論争は、実質的にロウレンソが主役であった。ロウレンソが自ら日乗に応答したことが記されている上「ロウレンソは病気にかかっており、それまでの長い話に疲れていたので」今度はフロイスが日乗に対して応答したとあり、「病気」にもかかわらず「それまでの長い話」をしていたロウレンソこそがこの論争の主役であることが窺える(一五六九年六月一日ルイ

ス・フロイス都発書翰、CEV I ff.263v.-264.『報告集』Ⅲ三、三〇八～三〇九頁)。さらに激昂した日乗はフロイス等が存在を主張する靈魂を見せることを要求し、「私は存在すべき知的物質を見せてもらうため汝のこの弟子(私の傍らにいたロレンソである)の首を斬ることにする」と言い、長刀を振りかざしたという(同上、CEV I f.264v. 同上三〇頁)。日乗の怒りの対象はフロイスよりもロウレンソであったことが知られる。

ルイス・フロイス著『日本史』は、もっとはつきりと「これまででのところは、ロウレンソ修道士がほぼ総てを自分自身で答えたのであり、幾つかの点のみ司祭が言うべきことを指示したのである」と述べている。さらに「日本人であり、殆ど盲目で、無知で、教養もなく、読み書きも出来ない」ロウレンソが「如何にして非常な明快さとの確さをもって学者の扱うべき問題に答えられたのか」という疑問に対し「当時ほぼ二十年近く修道士であり、また鋭い才知と天性の明晰な知性の人であることに加え、長年説教に訓練を重ね、イエズス会の学識ある司祭たちとの討論を通じてほぼ常にこうした問題について何度も聞き親しみ、(件の司祭らから) 当意即妙の回答をすべく教育されていたのである」とわざわざ詳細な説明を加えている(『日本史』第一部第八七章、Wicki, II, pp.287-288. 松田・川崎訳書第四、一七九～一八〇頁)。

いずれにしろ、ロウレンソこそが日乗との論争に立った主役であったことはイエズス会の認めるところであった。この他ロウレンソはしばしばイエズス会の司祭らに同伴して織田信長の許に参上し、信長と論争して信長が負けを認め、「予の

負けである故、子を助けよ」と言って彼に説教するよう命じたことがある(一五七九年一〇月二二日ジョン・フランシスコ都発書翰、CEV I 1453v. 『報告集』Ⅲ五、一九四～一九五頁)。またオルガンティーンと織田信長との問答でも仲介を行い、信長がこれほど困難な旅をして日本に来たのは「汝らが何かを求める盗賊であるためか、或いは汝らの説くことが重要なためか」と尋ねたのに対して、ロウレンソは「司祭らが盗賊であるのは真実で、彼らはただ日本人の靈魂と心を盗むためにやってきたのであり、悪魔の手からこれらを奪って創造主の手に委ねるためである」と返した(一五八〇年一〇月二〇日ロウレンソ・メシア一五八〇年度日本年報、CEV I f.475v. 476. 『報告集』Ⅲ五、二一六〇頁)¹³⁾。ここでイエズス会宣教師と信長との交渉で、ロウレンソが信長の寵愛を得て重要な役割を果たしたのであることが窺える。

さらにロウレンソはキリシタンからも信仰の指導者として篤い帰依を受けていた。死に瀕していた都のキリシタン女性は、既に聖体を受けられる状態ではなかったのでルイス・フロイスが聖遺物の入った箱を枕辺に持参した。それを見た女性は拜むべく座ろうとしたが、既に十字を切る事も叶わず使徒信経と総告白の一部を唱えた。近くにいた父母に箱を持参した司祭(フロイス)を覚えていかると尋ねられると「イルマン・ロウレンソよ、我らの主なるデウスが貴殿のかくも深き慈愛に報い給わんことを」と答えたという(一五七一年五月二五日ルイス・フロイス都発書翰、CEV I f.308. 『報告集』Ⅲ四、七一頁)。いまわの際に彼女の心の中にいた信仰の師は日本語で教えたロウレンソであったの

かもしれない。

*

ジョン・デ・トルレスは周防国出身の武士でキリシタンのアンドレスの子でコスメ・デ・トルレスにより生後八日で受洗、八歳の時豊後で再会し、同宿となり、フランシスコ・カブラルが上京して足利義昭、織田信長に謁見した折には通訳兼同行者として同伴したことが知られる¹⁴⁾。

ジョン・デ・トルレスの活動としてまずあげられるのは、豊後国で大友宗麟・同室(隠居後に奈多鑑基女でイザベルの渾名をもつ前妻を離縁して新たに婚姻関係となったジュリア)らの受洗の際に説教を専ら担当したことである。宗麟の受洗に先立つ新妻の受洗の際、説教師として派遣されたのはジョン・デ・トルレスであった(一五七八年一〇月一六日ルイス・フロイス臼杵発書翰、CEV I f.419. 『報告集』Ⅲ五、八九頁)。新妻の洗礼後、今度は宗麟の受洗に向けての説教に、その求めによって派遣されたのもジョンであり(同、*ibid.* 同九二頁)、「日曜日の説教が終わると、彼(宗麟―引用者)は多くの時間、修道士に祈禱文中の我らの言葉の正しい発音とアクセントについて」尋ねたのもジョンに対してであった(同、*ibid.* f.420 v. 同九二頁)。さらに「日曜日の一般の説教の後」「通常誰も入らない部屋」で宗麟の内心を聴いたのも彼である(同、*ibid.* 同九二～九三頁)。

この間ルイス・フロイスも宗麟の質問に答えているが(同、*ibid.* f.421 v. 同九五頁)、洗礼に向けての説教はジョン・デ・トルレスのものが正規だったと思われる。受洗後の日向遠征にもフ

ランシスコ・カブラル、ルイス・デ・アルメイダと共に従っている(同、ibid. f. 42v, 同100頁)。宗麟とその家族にとってジョアン・デ・トルレスは重要な説教者であった。

一方キリシタンを敵視する人々にとってもジョアン・デ・トルレスは宣教師以上に脅威となる存在だったようである。イエズス会から「イザベル」の渾名で呼ばれたキリシタン嫌いの宗麟前室の兄弟である大友家重臣田原親賢は、意に反して養子親虎がキリシタンに入信したことはジョアン・デ・トルレスの責任と断定した。「今回の悪事は日本語を流暢に喋れない司祭たちよりも、〔主に〕日本人であり〔親虎に〕手紙を書いて彼を毒した彼〔の修道士〕の方から生じた」と言ってその殺害を腹心の武士らに命じたという(一五七七年六月六日ルイス・フロイス白杵発書翰、Jap. Sin. 8.1. f. 116, CEV I f. 380. 『報告集』Ⅲ四、三四四頁)。因みに「イザベル」もまた「親虎がこの〔デウスの〕宗旨をすでに断念していたにもかかわらず、かの邪悪なジョアン¹⁵が密かに書簡により彼を引き戻した故、ジョアンが諸悪の根源(a ocasião destas males)ゆゑ」(同、Jap. Sin. 8.1. f. 116v, CEV I f. 382. 『報告集』Ⅲ四、三四九頁)と述べていた。いわゆる「異教徒」から見て脅威であったのは、ヨーロッパ人宣教師以上に日本人修道士の方であった。キリシタン信仰がまずは日本人同士の間で軋轢をもたらしていたことを示唆する事例といえよう。

以上ロウレンソ、ジョアン・デ・トルレス双方に共通するのは織田家、大友家等大名家とイエズス会との仲介者として、いわば外交的役割を果たしていたこと(この場合日本語力は不可欠であ

る)、およびイエズス会外の日本人からは、ヨーロッパ人宣教師以上に布教活動の主役であるかに見えていたことである。後述するように日本人の中にはロウレンソが、見捨てられた「伴天連」を見つけ「彼と共に金を稼ごうとして、各地を連れ廻っているのではないか」との疑いをもつ人々もいたという(『日本史』第一部第三章、Wicks, I, p. 258. 松田・川崎訳書第三、一七八頁、II(一)参照)。イエズス会外部の日本人から見ても、布教活動の主役と見られるほどこの二人の活躍は際立っていたと考えられる。

*

この他にも日本人修道士の活躍を窺わせる史料は多い。豊後では一五八五年頃¹⁶イエズス会の上長ペロ・ゴメスと大友宗麟の間で日本人修道士パウロが引つ張り風になっていた。ゴメスが説教の応援にパウロの派遣を要請したところ、宗麟は「司祭様に伝えよ。……今の今、私はパウロ修道士を四百人の異教徒を教化中の某所に派遣した。その後は別の場所に派遣する約束をしている」と回答した(一五八五年八月二〇日ルイス・フロイス長崎発書翰、CEV II f. 138. 『報告集』Ⅲ七、一五頁)。

伴天連追放令が発令された後、イエズス会士らは日本のキリシタンの大部分を擁する「下 Ximo」地方(九州)全域に一一五人以上が配置され、各地に分散して滞在することになった。このためキリシタンの所在する「下」の諸集落・諸村落で「今までは必要な司牧が出来なかった」のに比して「今や大勢の司祭と数多くの日本人修道士がいるおかげで、キリシタンたちは非常によく教化された。少なくともこの下の全キリシタン宗団に関する限り、

疑いもなく関白殿の起こした迫害は大きな利益であった」とガスパル・コエリヨは述べている(一五八九年二月二四日ガスパル・コエリヨ一五八八年度日本年報、CEV II f.235。『報告集』I一、五頁)。伴天連追放令の時期にあっても司牧の主要な要員は「司祭」と共に「日本人修道士」であったことが推測される。

(c) 論争の技量

もちろんヨーロッパ人宣教師に日本語を使用した活動が全くないなどということはあり得ない。日本語の達者なヨーロッパ人宣教師はイエズス会史料の中に幾人も見出すことができる。ジョアン・フェルナンデスはザビエル滞日の頃から日本語ができ、一五五一年の段階ですでに通詞としてコスメ・デ・トルレスに仕え(一五五一年一〇月二〇日ジョアン・フェルナンデス山口発書翰、『書翰集』訳一下、二七頁、二九頁、原I・p.177, p.185)、説教に通曉したため母語カステイリヤ語よりも日本語が流暢だと言われた(一五五五年九月二三日バルタザール・ガゴ平戸発書翰、『書翰集』訳二下、七九頁、原2・p.231)。「異教」(日本の神仏の教え)の批判もなしたようである(一五六二年一〇月一日アイレス・サンシエス豊後発書翰、CEV I f.101。『報告集』II二、三三頁)。

ガスパル・ヴィレラは「日本で最も洗練された(都の)宮廷の言葉を流暢に話し、説教し、告白を聴いた」(一五六五年一月二〇日アイリス・フロイス都発書翰、Jap.Sin 5, f.204v, CEV I f.177。『報告集』II二、三二七頁)。日本語で情熱的に説教し、前年に発

せられたローマ教皇の大赦を日本人に布告した(一五六六年九月一六日ミゲル・ヴァズ書翰、CEV I f.227。『報告集』III二、一六四頁)。大村領長崎で土地の領主から教会建設のためにと寄進された寺院に「土地の異教徒をことごとく集め」、教会への改造の計画を秘したまま(すなわちあくまでも「寺院」の所有者として)不評にめげず忍耐強く説教し、「所属すべきキリシタンを得る」ためにその全員に当たる一五〇〇名を改宗させて教会に所属すべき信徒を作り出した後、翌一五六九年に件の寺院を教会に改造するという改宗事業をやつてのけた(一五七一年二月四日ガスパル・ヴィレラ、コチン発書翰、CEV I f.302 v。『報告集』III四、四五頁)。

このほか管見の限りでも、街路で日本語で説教したギリエルメ・ペレイラ(一五六〇年一月一日ゴンサロ・フェルナンデス、ゴア発書翰、『書翰集』原訳四、三七頁、原4・p.25)、短期間に告白が聴けるほど日本語が上達し「デウスの格別の恩寵」と言われたバルタザール・ダ・コスタ(一五六六年三月三日ジャコメ・ゴンサルヴェス平戸発書翰、CEV I f.225 v.-226。『報告集』III三、一五七頁)、日本語が出来て日本人に広く愛されたというジョアン・ペドゥロ・クラッソ(一五八九年二月二四日ガスパル・コエリヨ一五八八年度年報、CEV II f.237 v。『報告集』I一、一三頁)、また日本語で説教し、かつ日本語をよく理解できたために、自分自身を殺そうとする「異教徒」の謀略を察知した修道士(一五七九年一月二日フランシスコ・カリヤン一五七九年度年報、Jap.Sin 46 f.30v。)など多くの事例がみられる。

しかし前述の通り日本語で日本人と交流できることと、「異教徒」との論争の覚悟が必要な説教ができ、従って「仏僧」との論争ができることは分けて考えなくてはならない。例えば上述のガスバル・ヴィレラも上京するにあたっては「口論や論争において通訳となるよう、またその他、主への聖なる奉仕となる事柄のために」日本人修道士ロウレンソを同伴した。それは「私は当地の言語を解しますが、結局のところ外国語 (madrasta、「継母」語即ち非母語―引用者) である一方、彼にとっては母語 (mai) だから」という理由からだった (一五五九年九月一日ガスバル・ヴィレラ日本発書翰、『書翰集』訳三、一二三頁、原3・p.157)。さらに説教、論争のためには日本語のみならず、日本文化への理解が必要なのはいまでもない。ロウレンソは「言語に大変優れ、才能があり、大変鋭敏で、デウスに関する事柄や日本の諸事の理解において、彼に勝る者は一人もいません」(一五五九年一月一日バルタザール・ガゴ豊後発書翰、『書翰集』訳三、二七二頁、原3・p.189)と評されている。事実ロウレンソは、「異教の寺院」に乗り込んで、その寺院の「仏僧」が行っていたキリスト教批判の説法を論破したという (一五六〇年二月一日ゴンサロ・フェルナンデスのゴア発書翰、『書翰集』原訳四、三八―三九頁、原4・p.26)。

日本語を学ぶのはさほど困難なことではなく、熱意次第で「二年で説教を行えるようになる」という見解もみられる (一五八〇年一月二〇日ロレンソ・メシア一五八〇年度年報、CEVI ff.472.『報告集』Ⅲ五、二五二頁)。しかしその裏付けとして

は、数人の司祭が司祭館の仕事を抱えつつ「一年の後に教師を伴わず支障なく告白を聴」くことができることが指摘されるのみで説教にはふれられていない。一方長らく大村で宣教活動に携わっていたアフオンソ・デルセナは、一七世紀に入り江戸幕府が禁教令を出した後に、日本でキリシタン宗団が存在するためには我々「ヨーロッパ人会員」を援助し、「異教徒」に説教しキリシタンに教理を教える土地出身者が不可欠であるとして次のように言った。

「実際に何名かの我らの司祭 (alguns padres nossos) は上手に説教し、土地の者から十分に理解されるが、その数は非常に少なく四名を超えることはない。そしてこれらの者も異教徒たちに満足に行く説教が出来ず、また多く矯正を加えなければ「仏僧」たちと議論することが出来ない。何故なら彼等「仏僧」の欺瞞と虚偽に通じるためには我らの誰も知らず理解していない彼等の書き物を知らなければならぬからである」(一六一八年四月八日アフオンソ・デルセナ、マカオ発書翰、Jap.Sin.17.f.141v)。「異教徒」に説教できるヨーロッパ人宣教師は突出した少数者に留まったと思われる。

現代でも欧米語が母語の話者が日本語を学ぶことはさほど容易とは考えられていない。英語を母語とする政府職員の外国語訓練のための機関である米国国務省FSI (Foreign Service Institute) では、英語話者の日本語習得はアラビア語、中国語 (広東語と北京語)、韓国語と共にカテゴリーⅣの「英語母語話者には極めて難しく言語 super-hard languages」としている。英語とポルトガル

語(ないしスペイン語)とは異なるが凡その目安にはなるように思われる。一日に四〜五時間の授業、一時間のコンピュータ教室、数時間の宿題など自習に当てるという集中訓練を行って目標達成まで八八週間(二二〇〇授業時間)を予定しているという¹⁷⁾。毎日の集中訓練でなお一年半はかかる計算になる。

来日したばかりでこれといった訓練法も確立しておらず、教則本などなしに母語話者から直接学びつつ、しかも毎日の教会の聖務を抱えながらの学習で、先に触れたように、八割程度のヨーロッパ人宣教師が一年程度の訓練の後日本語で告解(告白)を聴くことができるようになったイエズス会員の外国語習得能力と学習の熱意には驚嘆の他はない。しかしそれはなお「異教徒」に説教する宣教師を輩出するには至らなかった。だからこそ日本人説教者が必要とされたのだと考えられる。

II 説教の特質

(I) 話術と仏教の素養

前章でとりあげた日本人修道士ロウレンソの説教と論争の手法は、日本仏教についての造詣と在来信仰の伝道の手法とに裏打ちされたものだったとみられる。一五六六年、五島の領主から説教の依頼を受けてルイス・デ・アルメイダは説教に向き、「当地で我らが有する最良の通訳であり、信仰のことに精通しており、日本人からは非常に思慮深い人と見なされている。十四年前から「イエズス」会に在籍している」「日本人修道士」ロウレンソ¹⁸⁾を伴った。説教の場に臨んだアルメイダは、参集した聴衆に自分自

身が説教できないことを詫びた後、ロウレンソに説教を指示したが、それを聴いて感嘆している。

「彼の話は大胆かつ軽妙にして明解なものであり……私ほかの至福なる使徒のことを思い起こした。彼が述べたことは当地で我らが常に説いていることであつて、驚くには当たらないが、ただ、彼が〔述べたことの〕すべてを人々に理解させる際の軽妙さや明瞭さや、人々が彼の言葉を認めざるを得ないようにする話術には驚嘆させられた。……彼は自ら異教徒〔の立場〕になり、彼自身の〔先に示した〕道理に反駁した後、きわめて明確に疑問を説いたので、説教が終わると(三時間続いたであろう)、諸人は驚嘆し、崇拜すべきはデウスであると認めるようになった」(一五六六年一〇月二〇日ルイス・デ・アルメイダ志岐発書翰、Jap. Sin 6 ff.136v-137.; CEV I ff.215-215v. 『報告集』 III(一) 111-112頁)。

アルメイダの感想は「驚くには当たらない」内容と「驚嘆させられた」説教方法とに分かれており、後者の一つに「自ら異教徒〔の立場〕になり、彼自身の〔先に示した〕道理に反駁した後、きわめて明確に疑問を説いた」ことが記されている。こうした対話形式の説教はイエズス会も都で行い「修院にいる二人の日本人の少年が、一方は異教徒となり、他方がキリシタンとなって」行う討論を幕府の要人を招待した折「気晴らし」のために聴かせている(一五六五年六月一九日ルイス・フロイス都発書翰、Jap. Sin 5 ff.248v.; CEV I ff.185v. 『報告集』 III(二) 三四九頁)が、この手法をロウレンソが既に自家薬籠中のものとしていたことに「驚嘆させ

られた」のだと思われる。しかし、対話形式の教化は蓮如の「御文」を始め日本の仏教者がしばしば用いていた手法であり、ロウレンソは恐らく琵琶法師の生業の中で学んだと考えられる。

またその仏教的造詣にはイエズス会も最大の讃辞を送っている。ロウレンソは醜い外見とは対照的に「大いなる靈感と熱意をもって説教し、非常に豊富な言葉を自由に操り、それら〔の言葉〕はいとも愛嬌があり、明快、かつ思慮に富んでいたため、彼〔の話〕を聞く者はすべて驚嘆した。……幾度となく、はなはだ学識ある僧侶たちと討論したが、デウスの御恩寵によつて、かつて一度として負かされたことがなかった」(『日本史』第一部第三章、Wicki, I, p.257. 松田・川崎訳書第三、一七六―一七七頁)。しかし一方二、三人の日本人武士たちはその説教からロウレンソの正体に疑いをもった。「日本には鳩の飼いと称し、詐欺を生業にしている者がいるが」彼はその一人で「この伴天連が見捨てられているのを見つけ……日本〔国内〕で彼とともに金を稼ごうとして、各地を連れ廻っているのではないか」とわざわざ司祭に忠告した(同、*ibid.* p.258. 同、一七八頁)という。

「鳩の飼い」は「口先で人をたぶらかして世渡りをする人」で「もと、山伏や占者のような格好をして家々を回り、熊野の新宮・本宮のことを語っては、鳩の飼料と称して金をだまし取ったところから」そう呼ばれた(『日本国語大辞典』¹⁹⁾。ルイス・フロイスもこの「鳩の飼い」を根来寺、高野山、奈良の春日社と並べて「修道院」を有する、詐欺と窃盗のために子供を養育する集団としており(一五六五年一月二〇日ルイス・フロイス都発書翰、

Jap.Sin 5 f.200v, CEV I 174v、『報告集』III(二、三二〇頁)、宗教団体の一種とみていたと推測される。ロウレンソがその出身と誤解されたことは、日本の伝統的宗教集団に属する説教者・唱道者等の属性を色濃く身につけた姿を物語るものではないか²⁰⁾。事実ロウレンソは琵琶法師の出身であった。

さらにロウレンソは「日本の諸宗派に」精通し、ジョアン・フェルナンデスの書いた教義書が「理解されるように書物の文章を正し」たという(一五五五年九月二三日バルタザール・ガープ平戸発書翰、『書翰集』訳二下、八七頁、原2・pp.236-237)。さらに前章で述べたように「デウスに関する事柄や日本の諸事の理解において、彼に勝る者は一人もいません」との評価もあつた(一五五九年一月一日バルタザール・ガープ豊後発書翰、『書翰集』訳三、二七二頁、原3・p.189)。ロウレンソについて「もともと仏僧、つまり〔仏教における〕パードレだった者」である故「彼等(○仏僧達)の頹廢のすべてを知っています」(一五六〇年一月二七日メルシオール・ディアス、ゴア発書翰、『書翰集』原訳四、九九頁、原4・p.64)との指摘もある。「仏僧」の語の当否はともかく、高度な仏教的造詣を窺わせる証言といえよう。

こうした仏教に造詣の深い日本人修道士としてヴィセンテとういん(「洞院」か)もあげることができる。ヴィセンテとういんは若狭国出身で、著名なキリシタン養方軒パウロの息子であり、受洗して同宿としてイエズス会に奉仕し、一五八〇年に修道士となった。主に畿内で改宗事業に従事して細川ガラシアの改宗にも

関与した²⁰⁾。「大雄弁家であり、文章表現に豊かであり、和漢の文字に造詣深く、日本の諸宗派に精通し、ことに全宗派中第一位を占める禪宗について然りであった」ヴィセンテはヴァリニャーノの命でセミナリオの生徒に教授し「彼ら〔子供たち〕が彼の許で大いに進歩したことは、彼らのうち多くの者が短期間で」「異教徒たちに説教」でき「彼らの誤謬や虚偽を納得させ、そして多くの人々が我らの聖なる信仰に改宗するに至るほどであった」(『日本史』第一部第二十六章、Wicki, I, p.173. 松田・川崎訳書第三、九六―九七頁)という。

一五八四年頃、ヴィセンテは修道士として都地方「随一の才人」「偉大な説教師であり、言葉が優美なことでも知られ、日本の諸宗派にさわめて精通して」おり、その知識は「論争の際に仏僧や他の異教徒たちの謬見を明らかにする上で我らの説教師にとつて大いに必要なこと」とされていた(一五八四年一月二日ルイス・フロイス一五八三年度年報、Jap.Sin.45I f.72, CEV II f.91-91 v. 『報告集』Ⅲ六、二〇三頁)。高槻のセミナリオで日本の宗派についての講義を「殆ど総べてが武士 (fidalgos)〔の子弟〕か身分の高い人の息子」に対して行い「カトリックの教理についても日本の宗派と日本の誤りについての知識も教えているので、彼ら〔生徒〕の何人かは、仏僧や他の学者の前でも恥じることなく (sen pejo) 自由に説教ができる」と評されている(一五八四年九月三日ルイス・フロイス一五八四年度日本年報、Jap. Sin. 91I f.286)。都地区長であったオルガンティーン司祭は、このヴィセンテを「神学校の者たち及び同宿たちが、日本の各宗派の本旨を

学ぶこと」の教師として起用し、「今までここにいたすべての者の中で、もつとも宗旨に精通し、巧みで志堅固な人である。そしてこれにより毎日生ずる問答や議論は、そこに説教を聴きに来た人々に大きな満足を与えている。このことは、我らが仏僧の秘義、および呪文を知らなければできないことである」と評価されている(一五八五年八月二七日ルイス・フロイス長崎発書翰、CEV II f.15v. 『報告集』Ⅲ七、五六頁)。

以上のように改宗前に仏教の教義に通じていた日本人が修道士として、日本人僧侶との論争法や「異教徒」の疑問・批判に対処する方法を教授していたことが知られる。イエズス会士が日本の宗派を批判し日本人僧侶の反論に対処する方法を学んだのは、改宗した元僧侶からの場合が多い。

例えばルイス・フロイスに論争の指導をした元浄土宗の僧である。「彼より諸宗旨について某かのことを聴いたが、これは私が言葉の修練を行なったり、彼らの宗旨や礼拝について学者が呈する問いに答えうるようになる上で少なからず助けとなった」とフロイス本人は記している(一五六八年一〇月四日ルイス・フロイス堺発書翰、CEV I f.25I. 『報告集』Ⅲ二、一六三頁)。フランシスコ・カブラルに「日本の宗旨」を教え「彼が我々に教えてくれたことをもってすれば、たやすくは屈服しない僧侶はいないほど」だった博多の元僧侶ケイエン・ジョアン(一五七四年五月三一日フランシスコ・カブラル都発書翰、Jap.Sin. 7II f.209)や、「日本の宗旨の秘められた欺瞞」を宣教師に説いた有馬晴信の師の元僧侶ニシヨウ(一五八二年一〇月三二日ルイス・フロイス一

五八二年度年報、CEV II f.50v. 『報告集』Ⅲ六、九一頁）もこれに加えることができよう。

従ってイエズス会と「仏僧」との論争は、一面で日本人仏教者同士の論争の様相を呈していた。言い換えればイエズス会による「仏僧」攻撃であると共に改宗した元「仏僧」による仏教者への攻撃として、日本仏教界に衝撃や影響をもたらした可能性もある。仮にイエズス会の存在がなかったにしろ、有力大名の帰依をめぐり、また寺院の所有・継承をめぐり、さらには檀徒の獲得をめぐる僧侶間の競合はこの時代も盛んであった。宗論の結果により帰依する僧侶を変えた斎藤龍興の事例もある（一五六七年六月一二日ルイス・フロイス堺発書翰、CEV I ff.236v-237. 『報告集』Ⅲ三、一九七頁）。イエズス会が引き起こした論争は、一面で元「仏僧」らによる新たな信仰運動を想起させたとも想定でき、これに展望を見出した仏教者がいた可能性も考えられる。

一方それでは「仏僧」との論争の主役となった日本人修道士らのキリスト教の素養の内実はどのようなものであったのだろうか。先にあげたヴィンセントとその父養方軒パウロのように突出した理解者はいた。養方軒パウロの「諸宗派や日本の故事の知識」により「異教徒に説く公教要理」が洗練されていた（『日本史』第一部第二十六章、Wicki, I, p.172. 松田・川崎訳書第三、九六頁）という。またヴィンセントは著名な医師曲直瀬道三にキリスト教教義を教授した。ヴィンセントはコスメと二人で道三への説教を担当し、道三の筆録したヴィンセントの説教は「異教徒の字句、および理解の仕方」に合致した書き物で、大いなる光を与えるため

に利用された（一五八五年八月二七日ルイス・フロイス長崎発書翰、CEV II ff.158-158v. 『報告集』Ⅲ七、七〇頁）という。

その一方多くの日本人修道士にはかなりの問題があり水準に達していないと、来日の翌年にヴァリニャーノは指摘している。「彼らを受け入れることは既に述べたように不可避 (Inevitable) だった」としながら、実態は「修練期間 (noviciado) も何らかの試問 (probation)」もなく「規則や我らの会憲の何たるかも、学問の何たるか、隠遁の何たるかも知らず、一人を除いて我等の言葉を読むことも理解することもできず、頼りとなる書物も持たず」（一五八〇年一〇月二七日ヴァリニャーノ白杵発書翰、Jap. Sin 81 f.293v. 前掲『日本巡察記』三〇一～三〇二頁）、「暗誦しただけの公教要理 (catechismo) しか知らず、それで鸚鵡のように説教し、同様に暗誦した幾つかの説教も行う」のである。受け入れ後に「何らの苦行 (mortification) も矯正 (forma) もしないなら、イエズス会にとって少なからざる損害をもたらさずにはおかない大きな危険に（宣教師たちを）陥れることになる」（同、*ibid.*）と警戒の念を露わにしている。

イエズス会入会希望者が過ごすべき二年の修練期間 (*noviciado*) に基礎的な会憲も教えられず修行も行わず学問も教えられず「修院 (*casa*) に入ると直ちに以前行っていたこと」すなわち「日夜説教」することに忙殺されてしまい、訓練なしに活動する（同、*ibid.*）のであるから、当然のことといえよう。なぜそうなったのか。ヴァリニャーノの説明によれば彼らが教会の「同宿」として「教理を教え、説教し、その他多くの、言葉が出

来ないために司祭がなしえなかった仕事を「自ら」してきた」とくに報いるために「カテキズモを暗誦している以外は何も知らなかったにしろ」受け入れたのだという (Alvarez-Taladriz, J. L., op. cit. pp.184-185. 前掲『日本巡察記』八七頁)。

また彼らは貧弱なキリスト教教義の理解にもかかわらず、「かかる新参者に期待しうるものを大きく超え出た。すなわち我等の言語を読むことも書くことも、日本語を用いなければ我等(の語ること)も理解できない」にもかかわらず「司祭が要点を教える」なら、それ以上の指示なしに「我等の教会で通常の説教と思いついたその場の説教とを行ったほどの明敏さと熟達した能力を有していたのである」(ibid. p.185. 同)と述べている。

言い換えれば改宗事業のために日本語の説教は不可欠という、いわばやむを得ない事情から修道士として当然行うべき訓練やキリスト教理解の不足を放置したまま受け入れ、その活動に依存してきたのである。これが日本で一六世紀に行われたキリスト教の説教の問題点だとヴァリニャーノは指摘している。やはりここでも言語・文化の障壁は大きかった。こうした成り行きから日本の仏教文化の中で育った修道士たちが、主として自らの過去の素養に依拠してキリスト教の説教を行うという事態が生じたと思われる。そしてそれは必ずしもヨーロッパ人宣教師の期待にはそぐわない様々な、いわば副反応を生じさせたと予想される。

(2) 日本人修道士の立場

日本人修道士たちも、ヨーロッパ人司祭の命により布教活動に

従事している一方、必ずしも全面的にイエズス会に従属していたわけではなく、自ら弟子としてのキリシタンを開拓していた者もいたと考えられる。その一例として、ロウレンソ、ジョアン・デ・トルレスらとならんで顕著な活動で知られるダミアン(・ダ・クルス)の例が知られる。

ダミアンは筑前出身で、十七歳でバルタザール・ガーゴから受洗、ガスパル・ヴィレラにロウレンソらと共に同伴して上京して活動し、また博多でベルシヨール・デ・フィゲイレドの許で活動したが、突然退会、フランシスコ・カブラルの要請により再度入会したという。一五八六年十二月に死亡している²⁸⁾。

一五六二年頃ダミアンは博多で「或る有力な領主」の帰依を得て多数の人々が入信し、改宗に大きな成果を上げた。この報を得た司祭コスメ・デ・トルレスは、修道士ジョアン・フェルナンデスとルイス・デ・アルメイダとを博多に派遣した。ジョアン・フェルナンデスは博多での改宗を引き継がせ、ダミアンはアルメイダと共に布教のため平戸に派遣しようというのがトルレスの意図だった。ところが博多近在の「キリシタン」領主と家中の人々はダミアンが博多からそこに来るよう二人に懇請した。諸人のダミアンによせる愛情は深く「同地にはキリシタンになったが祈りの言葉総てはまだ知らない者が数多く、他にもキリシタンになりたいと希望する者がある」という理由からだった(一五六二年一月二五日ルイス・デ・アルメイダ日本発書翰、Jap.Sin.4 f.274 v. CEVII f.108v. 『報告集』Ⅲ二、五六―五七頁)。

またルイス・デ・アルメイダがダミアンを伴って行くこと知った

キリシタンたちは「ダミアンを連れて行かぬよう私に大変執拗に懇願した。なぜなら、彼は新たにキリシタンになった人たちを知っており、彼らと一緒に講話と祈禱を行なう上で、彼らの各人に何が必要であるかを心得ているため、かつまた〔キリシタンに〕なるうとしている人が大勢あって、諸人から深く愛されているため、さらには異教徒の改宗に適した人であるほか、数多の理由により、キリシタンらが彼を必要として」いるという理由からであった（同上、*ibid.*:275、*ibid.*:109、『報告集』Ⅲ二、五八頁）²⁴⁾。

いずれの懇請にもルイス・デ・アルメイダとジョアン・フェルナンデスはダミアンが平戸へ行くのは司祭トルレスの命であると回答して納得させたというが、改宗したキリシタンたちが信仰の師として、トルレスの派遣したジョアン・フェルナンデスよりはダミアンの方に強く傾倒していたことが窺える。

博多近在のキリシタン領主や博多のキリシタンにとつてダミアンは単にイエズス会からたまたま派遣された説教師ではなく、かけがえない信仰の師であったと思われる。「彼はその謙遜によつて諸人からたいそう愛されており、年齢は二十一歳くらいで、デウスへの奉仕のため、己が同国人の中でなすべき多くのことを自ら盛んに示している」（同書翰、*ibid.*:274 v. *ibid.*:ff.108-108 v. 同五六頁）とも記されている。

白杵の修練院にいたセバスチャンは新たに修道士になり、故郷の大きにいた親族四十七人を改宗させた。その中には頑固な「異教徒」で、キリシタンとなった自分の息子や孫数人を常に「もと

の宗教に戻るよう努め、彼らに出来る限りの妨害」をしていたセバスチャンの祖父も含まれていた。一向改宗しようとしないう祖父に対し「今あなたがキリシタンにならなくても、きつとそうなるだろうとデウスにおいて希望を持っています。というのは私は子供の時教会に入ってから、修道者となった今まで、いつもあなたが生きている盲目の状態を悟り、目を開くよう我らの主に祈ってきました。また今後も私は、あなたがキリシタンになるのをこの目で見るまで、祈り続けるのを止めないでしょう」と述べた（一五八五年八月二〇日ルイス・フロイス長崎発書翰、(CEVII ff.135v.『報告集』Ⅲ七、八〜九頁)。

これに対して祖父は「おまえは、いつも私のために祈っているのか、本当か、では私は教理の説教を聴くことを、おまえに約束しよう。もしデウスの掟がよいと思えたら、私はキリシタンになるう」と答えたという（同書翰、*ibid.* 同九頁）。こうして祖父は白杵に向き受洗に至ったというが、ここからは一族の一人が出家し、その折りを期待して一族の他の者も信仰に至るといふ、伝統的に日本社会にみられた親族とその出家したメンバーとの関係がキリシタン信仰においても存在していることがわかる。家族のつながりの中で信仰が維持されており、出家者の信仰も家族の絆を背景としていたことが窺われる。

以上にみられる信仰の指導者とその信徒との関係や、出家者とその家族との関係はいずれも中世から存在した日本社会の信仰をめぐる人間関係に合致しているとみられる。そして修道士たちの活動もまたこれに依拠し規定されたものだったように思われる。

ヴァリニャーノは「彼らの息子や兄弟がイエズス会に入ると、彼らは同国人とのやり取りの仕方を我等よりもずっとよく知っており、通常そうであるように見かけがよくて身分が高く、セミナリオで既に述べたように指導してゆけば、疑いなく「仏僧」らにしたのと同じことをするであろう」(Alvarez-Taladriz, J.L., op.cit. p. 184. 前掲『日本巡察記』八六頁)と述べているが、上記のダミアン、セバスチアンの二人も「同国人とのやり取りの仕方」により「仏僧」らにしたのと同じことをしているといえるのではないか。そしてそれはイエズス会の方針に依拠したものだとしても、在来の仏教信仰の一つの型にも合致していたと思われる。

ところで日本イエズス会内に日本人修道士はどれくらいいたのだろうか。一五八四年初頭に司祭と修道士総勢八〇名、うち修道士五〇名でそのうち日本人は二五名との証言がある(一五八四年一月六日ロレンソ・メシア、マカオ発書翰、CEV II.f.126。『報告集』Ⅲ六、二九二頁)。一五八八年、即ち伴天連追放令の翌年にはイエズス会員一三名、司祭四〇名、修道士七三名でこのうち日本人は四七名という(一五八八年二月二〇日ルイス・フロイス一五八七年度日本年報、CEV II.f.187v。『報告集』Ⅲ七、一五九頁)。人数のみからみると無視できる値ではなく、特に後者の数値は全体の四割に達する。日本イエズス会内で日本人修道士が何等かの影響を及ぼす可能性は決して低いとはいえないだろう。しかも彼らは日本人、殊に「異教徒」をも前にした説教という重要な役割の中心的担い手であるのだからなおさらといえよう。

こうした状況がヨーロッパ人司祭らに警戒感を引き起こすこと

は自然のなりゆきともいえよう。フランシスコ・カブラルはヴァリニャーノの日本人修道士採用方針に反対して次のように言う。すなわち日本人修道士は「ラテン語を知らず」その説教は上司の「パードレたちが指示したとおりのものにすぎないが、彼らは説教を四つ覚えれば早くも反抗心を起こし、とくにパードレが日本語を知らなければ、そのパードレに害をなす」(一五九六年一月一〇日フランシスコ・カブラル、ゴア発書翰、『イエズス会と日本』一、岩波書店、一九八二年、一七八頁)と指摘する。

そして自分が上長だった時、上述のジョアン・デ・トルレスを伴っていたが、カブラルが日本語のできないのにつけこみ「とくに私が異教徒たちの間に身を寄せていた時、彼はそこで威張っていた。私は知らぬ振りをして、神に忍耐力を乞うよりほかになすべがなかった」という(同書翰、同一七八頁)。さらに上述のダミアンについても突然司祭ベルシヨール・デ・フィゲイレドの許を去り「還俗して、一人の異教徒の殿に仕えた」ので、カブラル自身が「そこに行き、彼に働きかけて教会に連れ戻した」(同書翰、同一七九頁)という。

こうした従順ならざる日本人修道士の事例をあげて、類をみないほど傲慢・貪欲・無節操、かつ欺瞞にみちた国民である日本人が「エウロパ人より大勢になろうものなら、彼らだけで結束するかもしれない。彼らは、上に述べたような性格・資質を持っているので、深刻な分離や分裂が生じたり、あるいはわれわれが追放されて、彼ら自身が支配者となったりする危険が非常に大きい」というのは、彼らには、もしもそれを望むなら、為しうるだけの

天性と、そのための手段がそなわっているからである。彼らは現地人であるのに対し、われわれは外国人であって、彼らには親戚や友が大勢いるのに反し、われわれには親戚も友人もない。利害から友人でなくなってしまうからである」(同書翰、同一七四～一七七頁)と危惧を表明している。

カブラルの見解が妥当であるか否かは十分な検証が必要であり、卒爾に判断はできない。しかし日本人修道士がその重要な役割のために日本イエズス会内部で少なからぬ影響力をもち、また必ずしもイエズス会第一ではなく、宣教師の指示に従いつつも、自らの信仰と家族及び弟子たちとの人間関係にも基づき説教活動をしていた、と判断することはできるように思われる。

日本人のキリシタン信仰―むずびにかえて

一六一八年、江戸幕府のキリシタン禁令の後、イエズス会の宣教方針も消極的となり、キリシタンが退潮に向かっていった頃、司祭アフォンソ・デルセナは日本のキリシタン宗団は「日本人の創った」ものだと述べた。日本人をイエズス会に、同宿をセミナリオに受け入れられない「土地出身者なし」の状況では「この異教世界において改宗事業もキリシタン宗団の存在も不可能である。そしてこの(二語不明)の中にいない者は、日本について何も知らない。何故なら、形成されたキリシタン宗団全体 (*orda a christandade que esta feita*) は、ヨーロッパ人が創ったのではなく、土地出身の日本人が創ったからである」(一六一八年四月一八日マカオ発書翰、*Jap.Sin.17.F.141v.*)。

この聊か極端な断言はしかし、本稿で述べて来た日本人修道士の活動を考える時、一概に否定できないものをもっているのではないか。日本で受容されたキリシタン信仰は仏教色に色濃く染められた日本文化の中で育った日本人の自律的、主体的受容なくして発展しなかったことは明らかだからである。何等かの地域的特色は当然想定されよう²⁶⁾。

ヨーロッパ人宣教師も、彼らに出来るのは「ミサを立てキリシタンを告解」すること、そして「説教をなすべき土地出身者を導き、舵手として彼らに仕える」ことであり、その日本人達がヨーロッパ語とその文化の素養もなく、教義的造詣もカテキズモの暗誦以上に出なかつたにもかかわらず「司祭がなしえなかつた」仕事を達成したことは認めざるを得なかつた²⁶⁾。

少なくともイエズス会宣教師の布教したキリシタン信仰が日本に浸透した一要因として、日本人修道士による、日本仏教の素養に裏付けられた、従って幾分かは日本的色彩を帯びた説教をあげることが出来るように思われる。そして宣教師たちの残した報告書を見るとこの様相は、入会した修道士のみならずキリシタン全体にもあてはまると考えられる。キリシタンたちは日本の伝統的唱道者の風貌を具えた信仰指導者たちに従い、仏教文化の中で培われた信仰習俗、心性、言説及び人間関係になじみつつ信仰集団を形成していたかの如くである²⁷⁾。

このように想定することができた場合、アフォンソ・デルセナのいう「日本人の創った」キリシタン宗団を単に異国文化受容という一面からのみみることはできない。日本人の仏教者ないし

元仏教者の、異国からの宣教師の布教に触発された主体的な運動の一面をも有していたとみられるのであり、だからこそ「キリシタン」信仰は、日本人の信仰の歴史に簡単には消すことのできな時刻印を残したもののように思われる。こうした側面の考察は、七〇年ほどで三七万人に上る信者を獲得したキリシタン信仰の内実、また過酷な禁圧に耐えて存続した「かくれキリシタン」信仰の内実を問うためにも必要であることを最後に述べて、蕪雜に堕した本稿を閉じたい。

註

- (1) 五野井隆史「キリシタン時代の看坊について」(『徳川初期キリシタン史研究・補訂版』吉川弘文館、一九九二年、初出一九七九年) 同「禁制下のイエズス会と日本人宣教師」(同前著書)。高瀬弘一郎「イエズス会日本管区」(『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店、二〇〇一年、初出一九九三年)。
- (2) 柳田利夫「キリシタン教会内の非会員日本人」、その役割と性格について『史学』四八(四)、同「キリシタン教会内の非会員日本人」、教会組織の構成と問題及び教会と日本人の関係について『史学』四九(一)、共に一九七八年、森脇優紀「一六世紀末、イエズス会士が抱えた職制上のジレンマ」『ドウジユクのための規則』を事例として(『紀尾井史学』二二六、二〇〇七年)、岡美穂子「僧形の宣教師—日本イエズス会の同宿と「適応」の限界」(齋藤見編『宣教と適応』名古屋大学出版会、二〇二〇年)。なお「同宿」についての研究の詳細は岡論文序文を参照のこと。
- (3) 五野井前掲「禁制下のイエズス会と日本人宣教師」(注(1))に同

じ)。

- (4) 高瀬弘一郎『キリシタン時代のコレジオ』八木書店、二〇一七年。
- (5) 岡前掲論文(注(2))に同じ。同「キリスト教の伝来と日本社会」(佐藤文子・上島享編『宗教の受容と源流』(日本宗教史四)吉川弘文館、二〇二〇年)。
- (6) 高瀬前掲『キリシタン時代のコレジオ』(注(4))に同じ。一五頁。なお同書第一章三の注一〇(二七頁)も参照のこと。
- (7) 本史料の訳出にあたり、岡美穂子氏に御教示を賜った。文責が筆者にあることは勿論であるが、特記して謝意を表したい。
- (8) 松田毅一・川崎桃太訳『日本史』、中央公論社、第七—以下松田・川崎訳書第七の如く略記—では「ほどほどに話せる」(一四五頁)と訳されている。
- (9) 高瀬前掲『キリシタン時代のコレジオ』(注(4))に同じ。七四二頁。
- (10) 高瀬前掲『キリシタン時代のコレジオ』(注(4))に同じ。二七四頁。また五野井隆史『日本キリシタン史の研究』第一部第三章、第二章第一章等で言及されている。なお松田・川崎訳書第一、第一章注五七(一一〇頁)にその生涯の簡潔な記述がある。『日本史』第三部第一章(Wieki, V, pp.265-267。松田・川崎訳書第二二、四六〜四九頁)にその生涯と逝去が記され、同第一部第七章(Wieki, II, pp.211-213。同上第四、九六〜一〇〇頁)にその人となりと活動が記されている。
- (11) 同じ出来事を記した一五六五年一〇月二日ベルシヨール・デ・フィゲイレド書翰では「ルイス・デ・アルメイダ修道士がロレンソと称する日本人修道士を伴って彼「大村純忠」のもとに行った」(CEVI1:204。『報告集』Ⅲ三、六六頁)と記している。
- (12) ここで述べられている、日本の「仏僧」に対する織田信長の見解

は、ロウレンソを介してフロイスに伝えられた可能性を考慮すべきかもしれない。

- (13) 同じ記事はルイス・フロイス著『日本史』にも記載されている(第二部第六章、Wicki, III, p.203. 松田・川崎訳書第五、三〇頁)。
- (14) ジョアン・デ・トルレスについては、ルイス・デ・メデイナ「イエズス会士ホアン・デ・トーレスーヴィオラ奏者・日本人宣教師通訳」(『イエズス会士とキリシタン布教』岩田書院、二〇〇三年、初出一九八四年が生涯を詳細に論じている。最近では岡前掲論文(注(2)と同じ)が日本人イエズス会員の一人として論じている。
- (15) 『日本史』第一部第一一三章に「白杵にはフランシスコ・カブラル、ルイス・フロイスの〔両〕司祭、ならびに修道士ジョアン・デ・トルレスがおり、この〔シモン〕事件は、それら三名全員に、最後まで係わりを持つことになった」(Wicki, II, p.486. 松田・川崎訳書第七、九六〜九七頁)とあり、このジョアンはジョアン・デ・トルレスと知られる。
- (16) 本書翰の最後に「これが本年一五八五年の一月から七月末までに豊後で生じたことである」とあり、上記の出来事の大体の年次が推測される。
- (17) 鳥飼玖美子『話すための英語力』講談社(現代新書、二〇一七年、二一〜二三頁)。
- (18) 『日本史』第一部第六章ではこの修道士がロウレンソであると記す(Wicki, II, p.127. 松田・川崎訳書第九、二二九〜三三〇頁)。
- (19) 村上直次郎訳・渡邊世祐註『耶穌会士日本通信』上巻、二〇五頁注に「妖巫の類に鳩の飼と称するものあり、鳩が八幡宮の神使なりと云ふに因み飼料を食るの意味より出でたりと解せらる。伊勢貞丈は之を法度の害の義なりとし、不正なる事をなし人を誑す者を云ふと貞丈雑記に説けり、されば浮世物語にも「京にも田舎にも鳩のかひ
- と云ふ者ありて、萬のこの間を合せ、さながら其の根に入りたることは一もなければ、又知らぬこともなし」と説けり」(雄松堂書店、一九七〇年改訂復刻版第二刷、初版一九二八年)とある。
- (20) ガスパル・ヴィレラが都で布教を開始した当初に「鳩の飼い」の者が「日本語がわからないふりをしているのだ」と噂されたという(一五六五年一月二〇日ルイス・フロイス都発書翰、Jap.Sins.1200 v. CEV I:174v. 『報告集』III:三三〇頁)。ヴィレラも「鳩の飼い」の者とみられたのだが、この場合は「日本語がわからないふりをしている」という点からであり、ロウレンソのように伝統的唱道者とみられたのではないと思われる。
- (21) ヴィセンテとういんについては松田・川崎訳書第一章注一六に経歴が記されている(一一三〜一一四頁)。また『日本史』第一部第六章(Wicki, I, pp.172-173. 松田・川崎訳書第三、九六〜九七頁)に経歴の記述がある。
- (22) この部分 f.293 v. では farza (farsa 茶番)、f.297 v. では fuerza (不可避)となっており、後者で訳出した。なお訳出にあたり岡美穂子氏の御教示を得た。文責が筆者であることは勿論であるが、特記して謝意を表したい。
- (23) 高瀬前掲『キリシタン時代のコレジオ』二七四〜二七五頁。松田・川崎訳書第三・第三章注五(四六頁)に、また同第一〇・第三六章注一六(一三二〜一三三頁)に経歴が記されている。
- (24) この経緯は『日本史』第一部第四〇章(Wicki, I, pp.272-273. 松田・川崎訳書第六、二九六〜二九八頁)にも記されている。
- (25) ただしこのことをもって「キリシタン」信仰が十六世紀の日本独特の現象と判断できるかどうかの検討は必要であろう。世界各地のカトリック信者が、地域的特色を無視しうるほど統一されていたと想定することは困難だろうし、言語の障害がより少ないと思われる

ヨーロッパ地域にあっても同様の問題があると想定することもできるように思われる。

- (26) 戦後まもなく刊行されたC・R・ボクサー『キリシタン世紀の日本』(Charles Ralph Boxer, *The Christian Century in Japan 1549-1650*, University of California Press, Berkeley, (1951), second printing, corrected, 1967) では「ヨーロッパ人の手になった日本史は全部、イエズス会の布教はほとんどすべて西洋人パードレの活動であったと決めてかかっているように思われるが、一五八〇〜一六一四年を通してイエズス会士自身の通信を熟読すれば、日々の苦しい仕事を責任をもって果たしたのは、全く現地人のイルマンや同宿であったということが、充分明らかになる。ヴァリニャーノも……: 仏教諸宗派は「にカ」対するすべての政治的な文献を編纂したのは、日本人イルマンであったと述べている。最も流暢な日本語を操るヨーロッパ人である、日本人同僚と比較すると、その説教は無様で舌足らずなものであった。大路小路に入って説教をし、問答式に教理を教えたのは、イルマンや同宿であった。仏僧と神学上の論争を続けたのも彼らであり、仏教経典を調べて、仏僧 *bonzes* 自身の議論を論破するため、原典を探し出したのも彼等であった。……: 如上の事実はすべて、現地人イエズス会士こそ日本において頼みの綱である、というヴァリニャーノの以前の主張が正しかったことを証明するものである」(高瀬弘一郎訳『キリシタン世紀の日本』八木書店、二〇二一年、二五九〜二六〇頁)と指摘している。
- (27) これについては拙稿「日本人キリシタンの布教活動」『白山史学』五八、二〇二二年参照。

* 人間科学総合研究所客員研究員

【Abstract】

Crucial roles played by Japanese Jesuit brothers in the missionary work of the Society of Jesus in Japan in the 16th century

Chisato KANDA *

This article throws some light on the activities of Japanese Jesuit brothers. It was mainly native Japanese Jesuit brothers that performed sermons to fellow Japanese people, including those to pagan, believers in Buddhism, and even Buddhist priests, with the advantage in their Japanese language proficiency, which was considered too hard for the missionaries from Europe to achieve, even with long period of study. They also played important roles in disputes with “bonzos”, Buddhist priests, applying what they had learnt about the doctrinal content of Buddhism, thus were considered indispensable in Christian missionary work during the 16th century. On the other hand, their doctrinal accomplishment in the field of Christian thought was, in general very poor. Moreover, their activities in their missionary work were seldom guided by their superiors, and sometimes this caused more than a little discordance within the Society.

Key words : Society of Jesus, Japanese Jesuit brothers, Japanese language proficiency, disputes with “bonzos”, discordance.

イエズス会の修道士として布教していた日本人の活動について解明するのが本稿の目的であり、以下の点を述べた。日本人修道士たちは、異教徒や仏教の僧侶をも対象とした民衆へのイエズス会による説教を主として担当していた。当時ヨーロッパ人宣教師たちの間では、長期にわたり学習しても日本人なみに説教できるようになるのは困難とみなされていた日本語力において優れていたためである。布教活動にともなう「仏僧」との論争においても、身につけていた仏教教学の素養を活かして重要な役割を果し、そのために布教活動にとって不可欠の存在と見做されていた。しかし一方キリスト教の教義については概して著しく不十分であり、その布教活動が上長の指示に沿わない場合も多く、イエズス会の中で少なからぬ摩擦を生じることとなった。

キーワード：イエズス会、日本人修道士、日本語力、「仏僧」との論争、摩擦

* A visiting research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University